たのしい学び。本当の学び。大人も子どもも！— クラス便りとエッセイ

山びこ通信

DISCE LIBENS!
学校法人 北白川学園
山の学校
LVDVS COLLINVS

2017–2018
Dec.-Mar.
冬
学期号

クラス一覧 ページ　ことば 8　かず 9　しぜん 2~4　かいが 22　つくる 5,6　れきし 11　将棋 21
西洋の児童文学を読む 7　西洋古典を読む 7,11　数学が生まれる物語を読む
数学 9,13　英語 13,14　漢文 20　東洋古典を読む　ユークリッド幾何
ギリシャ語 18,19　ラテン語 17,18　イタリア語 14　ロシア語 16　フランス語 15　ドイツ語 17
山の学校ゼミ『社会 ／数学 ／調査研究 8／法律／生活と文化／倫理 8』　ウェブプログラミング

「三つ子の魂」の行方

——幼児教育と学校教育をめぐって

山の学校代表　**山下 太郎**

英語で「子ども」をインファント（infant）と言いますが、原義に照らすと「言葉を話せない者」という意味になります。赤ちゃんもそうですが、言葉を自由に操れない小さな子どもたちは、大人に何かを訴えるとき、言葉より行動や態度で——泣いたりすねたり怒ったりして——様々なメッセージを送ります。発する言葉も字句通りに受け取れないケースが多々あります（「きらい」は「すき」の意味であったり）。周囲の大人が、そうした「声なき声」も含めた子どもの「心の声」に日頃から注意深く耳を傾け、彼らの「心そのもの」を理解しようと努めるかぎり、子どもたちは安心して自分の思いや考えを「言葉」に託して他者に伝えるようになります。

この「安心」を子どもたちが幼児期に日常的に実感できるかどうか。これは子どもたち一人一人の人生にとっても、また子どもたちを受け入れる社会にとっても、大きな意味を持ちます。子ども同士の言葉のやり取りは、大人から見れば不完全で、しばしば誤解や争いに発展します。相互理解のためには、ときには大人が間に入ってそれぞれの「心の声」を「通訳」して双方に——ときには保護者に——伝える必要もあります。「過保護」でもなく「放置」でもなく、程よい頃合いを見計らって、程よい言葉を足したり引いたり、なぐさめたり、励ましたり。幼稚園の先生の仕事の一つは、そうした子どもたちの心を理解し、「通訳」をすることだと思います。

幼少期に限らず、自分の思いや考えを心から共感してくれる大人に囲まれて育つかどうかは、小学校以上の学校教育においても、大きな意味を持つと考えられます。学校教育の基本は言葉を用いて行われます。授業も、友だちとの会話も、様々なクラスの活動も、言葉なしには成り立ちません。その言葉のやりとりに子どもたちが自信をもって臨むことが学びの基本ですが、その鍵を握るのが幼児教育であり、家庭での言葉のやりとりです。

かりに大人が忙し過ぎて心に余裕がなかったり、自分の都合で物事を判断しがちな場合、大人が子どもに返す言葉の頻出語は「ダメ」と「イケマセン」になりがちです。この場合、子どもが汲み取ってほしかった「心の声」は誰にも受け止められず、封印されたままになるでしょう。それが日常的に 〈▶巻末へ続く〉

〈● 巻頭文つづき〉　積もり積もれば、小学校に上がっても、言葉を用いた学びの世界を肯定的にとらえ、言葉を使って積極的に社会に関わることに意義を見出しづらくなります。

「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。（しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもいない。）」（『星の王子さま』（サン＝テグジュペリ、内藤濯訳、岩波書店）

「はじめは子どもだった」ことを忘れずにいる大人に囲まれた子どもは、安心して学びの道を歩むでしょう。「三つ子の魂百まで」という言葉は、大人が「三つ子の魂＜を＞百まで＜忘れない＞」という意味で理解したいと思います。その心が枯渇した大人に囲まれたとき、子どもは、「競争」と位置づけなければ「勉強」に意欲を燃やすこともありません。

それに対し、子どもと接する大人が「三つ子の魂」――感性や探求心など――を失わない限り、子どもとの対話そのものが子どもにとって大切な学びの機会となるでしょう。子どもの「どうして？」に対して、「そんな（馬鹿な）ことを聞いて何の意味がある？」と返すか――司馬遼太郎氏は中学一年生の時、ニュー・ヨークの意味を授業中に尋ねて「地名に意味はあるか！」と叱られました――、大人が子どもと一緒に「どうしてかな？」と考えるか、その違いは大きいです。「どうして？」の言葉を守られて育った子どもは、学ぶこと自体に興味を抱き、末広がりに自らの学びの世界を広げ、深めるでしょう。

その差は、大学に入学した場合、顕著に現れます。競争の手段とみなして勉強に取り組んだ者は、入学と同時に学びへの関心を失うため、質問することすらできません。年齢とともに知的好奇心が干上がって、大学に入ったとたんインファント（言葉を話せない者）になり果てるのでは困ります。大学とは本来、学びの魂を輝かせ、真理の探究に情熱を傾ける者（真の意味のステューデント）のみで構成される場のはずです。現状は、大学の先生にとっても、そうした真摯に学ぶ学生にとっても、あるいはインファントとなった学生にとっても、理想とは隔たりのある形です。

もう一度子ども時代に目を向けましょう。子どもは一見無邪気に見えますが、魂の次元では大人と何も変わりません。それだけに、自分を見つめる大人の眼差しに真心があるかどうかを敏感に察知します。教育に携わる者は、人間としての己の魂の輝きがいつも試されています。大人を見つめる子どものまなざしは、大げさに言えば、その子の、そして、私たちの社会の未来を左右する畏怖すべき「試験」でもあります。

私は、今後学校教育がよりよい方向で改革されることを期待する一人ですが、その根本には上で述べたような「幼児教育的視点」が不可欠だと考えます。万一それが学校に期待できなくても、子どもを誰より間近で応援できる親自身が、日々己の「三つ子の魂」の行方を気に掛けつつ、真心をもって子どもと接するのであれば、何の憂いもないはずです。（山下 太郎）

2018年4月より、受講生が集まり次第開講となるクラスです。
テキストの最初からスタート出来るこの機会をどうぞお見逃しなく！

●『新約ギリシャ語初級』担当：堀川 宏
曜日・時間、内容や進め方は応相談
上記の他にも、ギリシャ語、ラテン語をはじめとする語学クラスには、新しいテキストに入るクラスが多数ございます。
詳しくはこちら　クラス便り p. 19 へ

●『漢文入門』担当：陳 佑真
曜日・時間、内容や進め方は応相談
受講生の関心に合わせてテキストや授業の方法を選びます。
全く漢文の勉強をしたことがない方も歓迎です。
詳しくはこちら　クラス紹介 p. 20 へ

その他のクラスも随時入会を受け付けております。詳しくはホームページもご覧下さい。

お申し込み、お問い合わせはこちらまで　TEL: 075–781–3215　FAX: 075-781-6073　E-mail: taro@kitashirakawa.jp

山びこ通信
2017–2018 冬 学期号
平成30年2月28日発行・通巻第56号
（平成15年7月第1号発行）
発行元　学校法人北白川学園　北白川幼稚園・山の学校　京都市左京区北白川山ノ元町41
FREE PAPER

『しぜん』A・B1・C1・C2　　担当　梁川 健哲

Aクラス

寒空の下、風に何度も吹き消されたり、焚き木のくべ方がまずかったりして、試行錯誤の後にやっとの思いで育てあげた、小さくも温かな火を囲む。その行為に、うまくは言い表せませんが、生きることの強い実感を覚えます。

高学年の子は、私が手を殆ど貸さずに見守る中、一通りのことが出来るようになってきました。地面に伏せてそっと息を吹きかける姿も様になっています。「イキを吹き込むと、火がイキかえるね」いつだか私が何気なく口にした言葉を、低学年の子が復唱してくれます。

焚き火や秘密基地の修繕の他には、冬の澄んだ空気の中、森の広場で鬼ごっこなどをして駆けまわる活動も多いです。久しぶりにもっと奥の「茶山」まで行くことになった日、「ろくむし」という伝承の遊びをみんなで試し、ドキドキしながら沢山汗をかきました。帰り道、歩きながら、「乳をくれた桂の木」という、ちょっと不思議な昔話をしました。たまに聞かせる「怖い話」の口直しのつもりだったのですが、人によっては少し怖くもあったようです。こうした山や自然に関する不思議さや怖さを含む言い伝えは、人間を謙虚にしてくれるので、とかく人間中心主義に陥りがちな現代に必要なものだと信じています。

その他取り組みとしては、野鳥を更に間近で観察すべく、昨年に続き、巣箱と餌台を設置しました。昨年は餌台にアトリの群れが通うようになり、窓ガラス越しに息を潜めてみんなで観察ができました。今年はどうなるでしょうか。楽しみの一つです。

B1クラス

このクラスも体を動かすことが好きです。ある日、上級生から「野球をしよう」と提案がありました。馴染みのない低学年の女の子たちはピンと来ない様子でしたが、とにかく野球というものがどういうルールなのか、教室を出る前に、ホワイトボードを使って上級生が熱心に説明してくれました。

「そうだ、自分のバットがあれば楽しいんじゃない？」みんなで「マイ・バット」を探しながら森の中を進みます。広場に着くと、まずは輪になって、キャッチボールの練習です。キャッチボールは初めてという女の子たちから「楽しい！」という言葉と笑顔がこぼれました。ボールは、軍手を重ねて丸めたもので、当たっても痛くありませんし、森の中では飛び跳ねすぎず、丁度良い塩梅に転がってくれます。これも、上級生が考えてくれたことです。「またしよう！」クラスが終わる頃には、低学年の女子たちもすっかり野球を好きになっていました。

別の日、打って変わってみんなの元気が無い日がありました。たまたまその日の小学校が終わるのが遅かったり、病み上がりであったりが重なった結果でしたが、稀にそうした「疲れ」を子

どもたちから感じることもあります。そんな時は特に、「一週間それぞれに色々とある中での、今この時間がどうあるべきか」という風に考えます。雨でもないのに外へ出たがらない子どもたちを少しだけ園庭に誘って、地面に絵を描いたり「落葉のお風呂」（かいが B クラスのみんなが集めたものをお借りしました）に入ったりしたあとは、室内でずっと工作をしていました。「お弁当」や「お人形」など、作るものは様々でしたが、穏やかに集中して取り組むみんなの表情を見ながら心の中で頷くとともに、今作っているものや目の前にある素材がどのように「しぜん」と繋がっているか、といったことなどについて、沢山の対話ができました。

C1 クラス

森の奥に、ひっそりとした素敵な場所を見つけました。「ここ、秘密基地にしようよ！」と口を揃えるみんな。何も手を加えなくても、斜面と木々にそれとなく囲まれており、アーチのようにせり出した丈夫な木にロープを吊るすとブランコ遊びもできました。次のクラスでは、お尻の痛さを解消するための座面に丁度良い木をみんなで探しながら、真っ直ぐ「基地」に向かいました。そして、ブランコの試作品ができると、真っ暗になるまで代わる代わる漕いで遊びました。

また、このクラスでは雨天室内で工作する時間がありました。「寒いから、冬ごもりができるみんなの家を作ろう」ということになり、コタツや暖炉が作られました。「一階はみんなが集まれて、二階はみんなの部屋で、先生は屋根裏ね！」各階をエレベーターでつないだり、屋上には天体望遠鏡をつけたり、アイデアが次々と生まれます。動物たちが泊まりに来て、みんなでぬくぬくと過ごす、そうしたストーリーを膨らませているだけで、何だか心が温まってくるようです。「先生、ほら、あったかいよ！」差し出された、手のひらにすっぽり収まるほどのコタツ布団に指を入れると、脱脂綿が内側に仕込まれていて、本当に温かかったので驚きました。

C２クラス

このクラスでは、「沢」と「秘密基地」が、活動の二大拠点となって久しいです。その日どちらで活動するかで意見が分かれることも減り、交互に行うことがみんなの取り決めとなりつつあります。

沢では「蟹の家（または遊び場、楽園）」などと呼ばれる活動が続きました。砂や倒木の破片などを盛り上げて流れを変えたり、水たまりを作ったりという、沢では割と頻繁に発生する遊びの一種ですが、ここまでみんなが繰り返し夢中になるのは、大好きな沢蟹が「この窪みを隠れ家にしてくれるのではないか」「この土手を渡ってくれるのではないか」といった想像が広がっていく時間でもあるからでしょう。次に来た時には、随分崩れていたり、思いのほか形を留めていたり、或いは動物の足跡が沢山残っていたりしますので、こうした変化がまた、想像力を喚起します。

「秘密基地」づくりについても同様のことが言えます。秋の台風は秘密基地をあばら屋にもすれば、沢山の材料を落としてもくれました。最近では近くの木に絡みついていた蔦を引っ張っていたら根っこ付きで抜けたので、これを基地の枝組みの根本に植えて絡ませたら補強にもなるし、春には葉が茂って天然の屋根ができるのではないか、

という発見がありました。

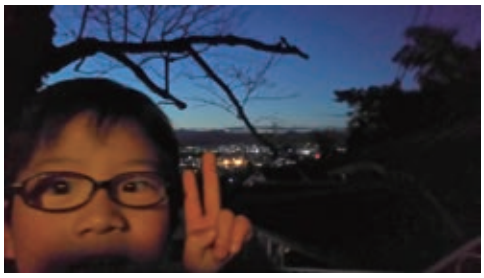
また、活動的な男の子のクラスなので賑やかになりがちですが、最近では鳥の声に耳を澄ますひとときを持てたことを嬉しく思いました。学年が上がるにつれ落ち着きの出てきた面もあるので、みんなが好きそうなマタギの狩りの話など、短い読み物でも輪読できたら楽しいのではと考えているところです。

このように、各クラスがそれぞれの形で、仲間との、自然との対話を続けています。

『しぜん』B2　　担当　森山 純

今学期は秋学期から引き継ぎのメンバーが３人。秋学期の山びこ通信を書いた頃にはまだ打ち解けておらず、思考や意見のくい違いもありましたが、現在はまさに“雨降って地固まる”。学年差も乗り越えて良い雰囲気で活動できています。

冬学期が始まって早々、N くんから「葉脈標本づくりをやりたい」という要望をもらいました。聞くと、自らインターネットで調べて興味をもったそうです。そこで、みんなで標本づくりに使えそうな葉っぱを集め、実践してみることにしました。私も中学校の理科の授業で行った覚えがあり、その際に使ったのは水酸化ナトリウムでした。水酸化ナトリウムは危険な薬品のため山の学校では使えないので、① 市販のパイプクリーナー（水酸化ナトリウム２％含有）に浸す、② 重曹（炭酸水素ナトリウム）水溶液で煮る、の二通りを試しました。結果的には、どちらの方法でも葉脈標本をつくるほどしっかり葉っぱを分解させられず、実験自体は失敗してしまいました。しかし、② の方では熱湯に重曹を入れた際に二酸化炭素が発生する様子や、煮沸中に葉っぱの色が変化していく様子、分解されやすい葉っぱとそうでない葉っぱがあること、そして時間が経つにつれて良い匂いがしてくるなど、様々な発見があり、メンバーたちはとても楽しんでいるようでした。どうしても大人は「葉脈標本をつくる」という最終目的に意識がいきがちで、私は少し落胆していたのですが、終わったあとのメンバーたちの声、「今日楽しかった！」。そう、これが一番大事ですね。やって良かったです。あと残り３回のしぜんクラス、この声をたくさん言ってもらえるように頑張りたいと思います。



『つくる』1～2年　　担当　山中 壱朗

冬学期では、大きい作品を作る際にグループで取り組むこともありますが、各々で違う作品に取り組むことが大半です。自分のペースで取り組むことができる分、素材や大きさ、色など決めなければならないことはたくさんあります。また、同じ目的であっても何を使うかという選択肢は様々で、たとえば色の付け方（ペン、スプレー、色紙など）、貼る（テープ、のり、ボンドなど）、切る（はさみ、カッター、手でちぎるなど）が挙げられます。いずれも基本的な動作ですが、どれを選ぶかによって作品の見た目やキャラクターに大きく影響します。

このクラスでの私の役割は道具の出し入れがほとんどとなりつつありますが、手が止まるような場面では、いくつか提案をしてそれぞれを試してもらうようにしております。ここでは箱に弦（輪ゴム）を張る場面について触れますが、箱に切り込みを入れて切り込みに輪ゴムをはめる方法と、輪ゴムを切って両末端の結び目で固定する方法を試してもらいました（時間があれば弦の素材、太さや張力の違いも比べたいと思いました）。写真の通り既に作っていた箱の強度のことも踏まえて、うまく作品に取り入れてくれました。

「つくる」を担当してもうすぐ1年が経ちますが、雑談を交えながらも作業のときに時折見せる真剣な表情、そして作者の「こだわり」が感じられる作品を春学期から何度も目にしてきました。私は「つくる」のときの様子しか見ることはできませんが、学校や家庭での生活を通して「軸」がしっかりと形成されており、言葉には出さずともお互いの良い部分を認め合うこと、良いと感じた部分を自身の作品に取り入れられるかを絶えず考えることが自然とできているように思えます。

『つくる』3年・4～6年　担当　福西 亮馬

そのときのクラスの様子や、個々の興味を探り、生徒たちとの間で「今日何を作るか」を相談しながら、取り組んでいます。

３年クラスでは、Aoi ちゃんが『スクイーズ』というスポンジを使った工作に家で夢中になっていると聞き、それを一から作るところを見せてもらいました。「好きになったら一途」という様子が垣間見られました。Ako ちゃんはスクラッチに興味が出ました。最初は市販のもので挑戦しましたが、自分でも好きな色で下地を用意できたらなあというのが、次の興味です。クレヨンの上に黒のアクリル絵の具を塗って、それは実現できます。夢がさらに広がるように応援したいです。

４～６年クラスでは、12 月に光るクリスマス・ツリーを作り、1 月にダンボール工作をしました。写真ではそれぞれ、Chi 君が日本の城を、Ryo 君が宇宙船の発射台を、Tomo 君がツリーを作っているところです。

生徒たちは独自の発想・アイデアを持っています。ふだんは眠っているそれが、材料や道具を目にしたとき、またそれらの不足をほどほどに経験するとき、活性化します。また、困難を「自分のこと」として耐えたとき、そのあとの達成感はひとしおです。そうやって、「自分の分身」ともいえる工作世界を、目に見える形に落とし込むお手伝いを、これからも陰ながら続けたいと私は思います。

『西洋の児童文学を読む』　担当　福西 亮馬

このクラスでは、『王への手紙』（トンケ・ドラフト、西村由美訳、岩波少年文庫）の上・下巻を読んでいます。いよいよ上巻が終わります。（この稿を書いている時点で、あと二週分です）。一週間に一節ずつ、一年かけてじっくり読んできました。

物語自体は、十六歳の少年ティウリが、東の母国から出発し、西の隣国まで、死んだ騎士の代わりに手紙を届けるという、シンプルな構成です。今読んでいる個所は、物語的にも、地理的にも、そのちょうど真ん中の地点です。大山脈という場所です。

ここで、自分を信用することで何とか苦難を乗り越えてきたティウリに、一つの転機が訪れます。これまでも幾人かの理解者と道中を共にすることはあったにせよ、彼は心中では孤独な旅を続けてきました。手紙のことをだれにも打ち明けられないからです。物音に警戒し、いつ敵が襲ってきて手紙を奪われるかもしれないという不安と、つねに背中合わせでした。人を見ればまずは敵かと不信を抱くことにも慣れてきました。

そんな折、年の近い山育ちの少年と出会います。彼の名はピアック。ティウリには騎士からの任務があるように、ピアックにもまた彼の仕える賢者からの任務があります。それは「ティウリを手助けするように」というものでした。ピアックはティウリの秘密に気付いて、こう打ち明けます。

> 「だけど、ぼくがいったん知ったからには、ぼくが知ってるってことをきみが知ってたほうがいいと思う。そうすれば、きみも気が楽になるし、ぼくも知らないふりをする必要がない。」（5.4）

ティウリはそれで心を開き、「きみを完全に信用する。」と握手を求めます。そのあと、秘密の共有者を得たティウリの心境とは、次のようなものでした。

> いまはもう、疲れや痛み、心配や不信の念になやまされることなく、すべてがずっとよく見えるようになった気がした。（5.4）

こうして物語は後半へと進みます。二人旅となってからも危険はさらに増し、スパイが彼らの後をつけ狙います。そのとき、クラスでは、生徒たちは六年生になっているでしょう。あと一年あります。ぜひ読み終え、大団円を迎えましょう。

クラス紹介 『西洋古典を読む』

中学・高校生対象　▶クラス便りは p.11 へ
水曜 18:40 ～ 20:00（予定）　担当　福西亮馬

このクラスでは、セネカ『心の平静について』を、英訳と日本語訳を併用して読みます。英訳は、『Seneca On the Shortness of Life』(C. D. N. Costa 訳、Penguin Great Ideas、2005)、日本語訳は『人生の短さについて』（茂手木元蔵訳、岩波文庫）です。

内容は、「もし何か（言葉の）薬をお持ちなら」ということで、セレヌスという人がセネカに不安を相談するところから始まります。「自分のこういうところが嫌で、くよくよするんです」と。今でいう「お悩み相談室」です。そこで、セネカが出した（言葉の）処方箋とは、「自分に信頼し、自分は正道を歩んでいると信ずる」（茂手木訳 2.2）というものです。

セネカは、セレヌスの症状に対して、「十分に健康でないのではなくて、十分に健康に慣れていないのだ」（茂手木訳 2.1）と述べます。砕けて言い直すと、「あなたの精神は十分に健康です。それについて十分に自覚していないだけです」と。これには、セネカ『人生の短さについて』で展開される「人生は十分に長い」の逆説を連想します。いろいろなメディアを通じて、健康法やら勉強法やらで、「あれがないから」「これがないから」と不足を訴えられると、つい不安になってしまう現代人にとっても、十分にふさわしい切り口だと思います。ご興味を持たれた方のご参加をお待ちしています。

『ことば』1～2年
山の学校ゼミ『調査研究』『倫理』　担当　浅野 直樹

ことば１～２年クラスでは、お題に対する答えを書いて、同じ（違う）答えを書いた人が勝ちというゲームを楽しみました。同じ答えを書いた人が勝ちというルールよりも、違う答えを書いた人が勝ちというルールのほうが盛り上がりました。そちらのルールでは、お題には沿いつつも他の人が思いつかないような答えを考えるところに頭を使います。思いつかなかったけれども言われてみれば確かにそうだという答えに何度も感心させられました。

このゲームから多少強引に山の学校ゼミ（調査研究）クラスのテーマにつなげますと、同じ答えを書くというのが近代的な一元モデルで、違う答えを書くというのがポストモダン的な多元モデルです。一つの絶対的な真理を想定することが難しくなったポストモダンの状況下でどのような小説があり得るのかということを西尾維新さんに着目しながら追究しています。

こうした問題意識は山の学校ゼミ（倫理）クラスで取り上げた柄谷行人さんの問題意識とも共通しています。柄谷行人『日本近代文学の起源』によると、近代小説に見られる「風景」や「内面」は、絵画における遠近法と同じく、特定の時代に結びついた一つのルールに過ぎません。そうだとするなら、近代小説とは別の形のポストモダン小説があってもよいはずです。

いくつかのクラスのことを強引にまとめようとしたために話が飛躍してややこしくなってしまいましたが、ことばを用いて多面的に考え、それを他の人に伝えるという点にこれらクラスの共通項を見出しました。

『ことば』3～4年・4～5年　担当　福西 亮馬

両クラスとも、百人一首、俳句、推理クイズ、漢字を、ローテーションして取り組んでいます。百人一首では、３～４年生にはじめての生徒が多いので、まずは二十枚に制限しています。その方が同じ札になじみやすく、得意札を作りやすいからです。何事も導入が肝心です。最初は「何だろう、何だろう？」と思っていた生徒が、俳句よりも長い五七五七七のリズムに、次第に興味を示してくれるのが、私もうれしいです。坊主めくりでも、「姫の札は、それを詠んでから場の札をもらう」など、さりげなく耳に入れる機会を設けています。一方、俳句では、定型を意識しつつ、一週間の出来事をつづってもらうことが多いです。それが一種のコミュニケーションの役目を果たしています。俳句の全作品は、生徒ごとにまとめ、ずっと保存しています。それをまたお見せします。そのとき、思い出をふりかえりましょう。

推理クイズでは、小学生は「謎を解く」という形式が好きなのだなと実感します。解けないとムキになるところが、生徒たちと私との接点です。また漢字では、「先生を困らせる問題」というのがはやっています。漢字の成分を分解し、復元する問題です。（導入はこちらが問題を出します）。漢字辞典から、習ったもの、習っていないもの、無差別に取材された問題に、私が「うーん！」とうなる様子が、生徒たちにとっては作り甲斐のようです。「宿題を先生に出す」という逆転のモチーフです。

４～５年クラスでは、『シュナの旅』（宮崎駿、徳間書店）を読み終えました。今は『大どろぼうホッツェンプロッツ』（プロイスラー、偕成社）のシリーズを読んでいます。

クラスでしたことが、そのときそのときの記念になればと思います。

『かず』1～2年
『高校数学』A 『中学・高校数学』B 『高校数学』C

担当 浅野 直樹

受講生との対話を大事にしています。

かず１～２年クラスでは迷路やパズルに取り組む際に、近くで見守ってうなづいてあげるだけで俄然解きやすくなるようです。独り言のように「こっちに進むのはダメだから…」などと言いながらスムーズに解くという姿を見守るということが何度もありました。自分の中で一人で対話できるようになると強いですね。

中学数学では「重心が頂点と対辺の中点を結んだ線分を２：１に内分することを証明せよ」という問題で、メネラウスの定理で解けないかと質問を受けたことが印象的でした。というのも、その証明は中点連結定理の相似で証明するのが定番で、それしか私の頭になかったからです。メネラウスの定理では無理じゃないかと最初は思ったのですが、よくよく考えると証明できることがわかりました。それは無理だと一蹴せずに、立ち止まって考えてみてよかったです。

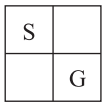
高校数学ではそれぞれの状況に応じた問題を用意して解いてもらうということが対話の一環になっています。高校１年生に数学１Ａのごく基本的な問題からセンター試験レベルまで段階的に練習してもらったり、マーク式の私大受験生に過去問と類似した問題を渡したり、記述式の国公立大受験生に各種の典型問題を解いてもらったりしています。私も事前に問題を解いてきていますので、ここが難所だとか、前にやったあの問題に似ているとか、感想を言い合っています。

『かず』3～4年・4～5年　　担当　福西 亮馬

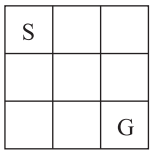
あるとき、３～４年生クラスでは、次のような「数え上げ」の問題をしました。

問１　たてよこに仕切った部屋がある。「下」と「右」にしか移動できないとき、Ｓから Ｇまで、どういう通り方があるか？

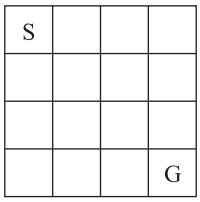
１）



２）



３）？



これは次のように問題文を書きかえると、考えやすいです。

【書きかえ】

1）コントローラーがある。「↓」ボタンを１回、「→」ボタンを１回、合計２回ボタンを押す順番は何パターンあるか？

2）コントローラーがある。「↓」ボタンを２回、「→」ボタンを２回、合計４回ボタンを押す順番は何パターンあるか？

1）は上回りと下周りで２パターン、2）は６パターンあります。（4 パターンかな、と思って違うのが、興味深いところです）。そして 3）ではどうなるか、と考え続けました。

この問題の導入は、以下のような「パスカルの三角形」をかくことでした。左側と上側に 1 を書きつらね、十字の合流点で足し算をしていきます。この作業は、意味を知らないうちは退屈のはずで、私の予想では、「10 分ぐらいで飽きるかな？」と思っていました。ですが、生徒たちは「千こえた！」「ぼく、1 万まで行った！」と互いの歓声で楽しみ合い、クラスの時間が終わるまで調べてくれました。それを家に持ち帰ってまでしてくれました。

1	1	1	1	…
1	2	3	4	
1	3	6	10	
1	4	10	？	
⋮				（パスカルの三角形）

たてよこ 11 段ぐらいまで（その時は電卓を駆使しました）「どこまで増えるのかな？」という興味が続きました。そして右下にくる数字は、残念ながら、全員バラバラでした。ですが、その最後の「せーの！」の見せ合いが福笑いみたいでした。

4 ～ 5 年クラスでは、次のような問題を考えました。そのときの 5 年生の A ちゃんの「考え方」を大事に思ったので、書き記しておきます。

問 2　3 つのサイコロを A、B、C とする。A≦B≦C となるのは何パターンあるか？

【A ちゃんの考え方】

（1,1,1）（1,1,2）（1,1,3）（1,1,4）（1,1,5）（1,1,6）　で 6 通り。
（1,2,2）（1,2,3）（1,2,4）（1,2,5）（1,2,6）　で 5 通り。
（1,3,*）は 4 通り。
（1,4,*）は 3 通り。
（1,5,*）は 2 通り。
（1,6,*）は 1 通り。

（1,*,*）の総数は、6+5+4+3+2+1=21 と、「計算」できる。

同様に、（2,*,*）を調べる時も、（2,2,2）からスタートして、5+4+3+2+1=15 だとわかる。

よって、全体で何を計算すればいいかというと、

6+5+4+3+2+1
5+4+3+2+1
4+3+2+1
3+2+1
2+1
1

というわけなので、すべてを数え上げると、56 通り。

このような「数え上げ」の問題は、A ちゃんのように「まず、やってみる」ことが大事です。そしてその経験の中に、調べ方を工夫したことで、途中から計算方法が見つかっています。こうなれば、しめたものです。A ちゃんも、このときのことをぜひ自信にしてください。

なお上でみたことは、実際にはもう少し後になってから、確率のところで学びます。

小学生『れきし』　担当　吉川 弘晃

通常授業では去年と同じく江戸時代に関する基本書をみんなで読み進めていますが（深谷克己『江戸時代』岩波ジュニア新書、2000 年）、最初の２回の授業は自由研究の発表会にしました。４人の生徒さんは江戸時代に関する次のようなテーマを設定して研究しました。「江戸時代の武士の禄制度」、「シーボルト事件」、「朝鮮通信使と京都」、「三井高利」。各自、作成した資料と参考文献を持ち寄って、10 分程度で報告を行いましたが、この際に講師が示したルールは 3 つ。① 報告者は大きな声でゆっくり話すこと、② 報告者は発表で参考にした情報源を示すこと（著者、書名、出版社、出版年度）、③ 聞き手は静かに注意深く報告を聞きながら、質問と感想を言えるように準備すること。生徒さんが皆、これらのルールをしっかり守ってくれたおかげで、教室は高校や大学のゼミさながらの熱気に包まれ、議論では講師も驚くほどの論点があがりました。また、中には詳しい図や写真を示しながら発表した生徒さんもいて、皆さんの理解を大きく助けました。さらに、近年の日本史研究に基づく教科書の内容が、社会経済や国際関係といった上記のテーマ選定に活かされているのも喜ばしいことです。

21 世紀の IT 時代は、インターネットや書籍で膨大な知識を手に入れやすくなった分、ただ事項を暗記するだけでなく、それらを自分なりにストーリーにまとめ、根拠を示しながら相手に伝えるという技術が必要になります。「れきし」クラスが、歴史の知識を増やすだけでなく、そうした技術の鍛錬を楽しく行える場になっていれば幸いです。小学生のうちから自分とは異なる他者の存在や視点に触れながら、世の中の様々な問題について歴史的に考える力を少しずつ身につけていってほしいと思います。

『西洋古典を読む』　担当　福西 亮馬

生徒の A さんが夏休みに読んだ、『知ろうとすること。』（早野龍五、糸井重里、新潮文庫）という本を私も読みました。「混乱した状態から、より真実に近い状態と思える方に向かって、手続きを踏んでいく」（上掲書 p171）という考え方をベースに、福島の原発事故で著者の実践したことが示されており、私にも大変勉強になりました。

ところで、「真実」という言葉は、ギリシャ語ではアレーテイア（ἀλήθεια, aletheia）と書きます。『ギリシア神話を学ぶ人のために』（高橋宏幸、世界思想社）に、『真実の本義は「忘れてはならないこと」である』（p172）とあります。さらに Wikipedia によると、アレーテイアの中に隠れるレーテー（Λήθη, Lethe）は、ギリシャ神話に登場する「忘却の川」のことで、そこに否定辞のア（α-）と、接尾辞のイア（-ια）（抽象名詞化）とが組み合わさり、「非忘却のこと」という意味になるようです。昔から「これだけは忘れずに」という思いで伝えられ、今もそうだと認められる事柄には、より多くの真実味がある、というわけです。たとえば「人はいつか死ぬ」がそうです。

このクラスでは、セネカ『人生の短さについて』の英訳を少しずつ、和訳と原文を横に置きながら読んでいます。この稿を書いている時点で 18 章まで終えました。全 20 章、もうすぐ読了です。これまでそこから得た言葉をヒントにしながら、A さんとは「長く生きるとは？」について考えてきました。私自身、読む前と読む後との変化がありました。それを端的に表すならば、9 章 1 節の「ただちに生きよ」（protinus vive）という言葉が深く感じられたことです。

ただちに生き「ない」例として、17 章 5 節にこうあります。

> われわれは公職立候補の苦労を思い留まったことがあろうか。思い留まったとしても、お次ぎは他人の立候補の応援を始める。われわれは人を告訴する骨折りを捨てたことがあるか。捨てたとしても、今度は裁判する骨折りを手に入れる。裁判官を止めた者があるか。止めたとしても、次には予審判事になる。他人の財産の管理に雇われて老い込んでしまった者があるではないか。今度は自分の資産に悩まされる。
>
> （訳は『人生の短さについて』（茂手木元蔵訳、岩波文庫）より）

このような生き方を鳥瞰して、セネカは同じ 17 章 5 節で「哀れの終焉を求めるのではなく、哀れの内容を変えるだけだ」（Miseriarum non finis quaeritur, sed materia mutatur）と言います。何ら新しい展望が付け足されない「たらいまわしの生き方」には、映画『生きる』（黒澤明監督、志村喬主演）ではありませんが、「自分はいったい何をしてきたのだろう？」と、「生きているふり」の多さを反省せざるをえない時がくるでしょう。多忙だけに意味を求める時間は、ただその表面を容赦なく流れ去るでしょう。「現在」において垂直に掘り抜くことが求められます。それが「ただちに生きよ」（protinus vive）であり、私なりに、「青春（熱意）を忘れずに」と表現したいと思います。A さんは A さんで、きっとまた、別の表現をお持ちでしょう。それを十年、二十年経ってから、「あの時はこう考えていた」と、照合することができれば、楽しみがより広がると思います。

また、テキストを読みながら、A さんの学校での出来事を伺うことがあります。それが私にとって大変刺激になります。その一つに、A さんは高校一年生のころに、模擬国連会議の高校生会議に参加し、次のような疑問を持ったそうです。「会議の仕組みについていくことに精一杯で、それを活かしきれなかったのではないか」と。では、どうすればいいかと、A さんは考え、実行します。「自分たちの学校でも、模擬国連会議を作ろう。そうすれば、先の会議でも、より生きた経験を得られるはず」と。そうして有志を募って立ち上げ、運営し、三年目に入るそうです。「規模はまだ十名程度ですが」と、A さんははにかんで答えます。けれども、その方向性が今までにあったか、なかったかが重要です。たとえば、ホワイトボードの上で縦横の組み合わせで作れる矢印を議論していたところから、マーカーをホワイトボードに突き立て、そのマーカー自体を第三の矢印に加えること、それが「忘れてはならないこと」であるか、どうかです。もしその答がイエスであるならば、その取り組みは、真実の多い時間となるでしょう。

私は、A さんが現状に対する疑問を包み隠さず、もっとよくするにはどうすればよいかと考えたこと、その熱意こそ A さんの実体であり、「知ろうとすること」の実践だと思います。A さんが、学校や社会という場でやろうとしていることは、人からも喜ばれることだと思い、賛同します。実績を作ったことも、素晴らしいと思います。その履歴を見て、心を動かされる人が次第に増えていくからです。だから、A さんを含める仲間たちは、これからもますます熱量を増していくでしょう。それが、よりよい方向を忘れていなければ。

虚偽よりも、真実の多い時間。ふりよりも、青春そのものの人生。忘れることの少ないそれを、セネカは「長い」と言うのでしょう。

『中学数学』2～3年　担当　吉川 弘晃

普段の授業では、各自の学習進度や理解度に応じて、基礎から応用まで幅広く問題を用意して解いてもらい、講師が解説を行うというスタイルを取ります。回数が後になると、一筋縄ではいかない、過去に習った事項が複数含まれているような問題にも数多く挑戦してもらっています。こうした「難問」の難しさには少なくとも 3 タイプあるように思われます。① 計算過程が長く複雑になりがちなもの（平方根の処理）、② 複数の公式や定理を順番に使う必要があるもの（関数グラフと文章題の問題）、③ 一見すると公式を利用できることに気づきにくいもの（図形の問題）。

これら 3 つについては、徐々に慣れていくしか対策はありませんが、具体的な方策を挙げるとすれば次の通りです。第一に、①と②について「計算過程を紙にしっかり残す癖をつけること」です。高校入試では計算過程が見られないことが多いからといって、小さな紙に滅茶苦茶に書いてしまうと、行き詰まった際に、それまでの自分の考えをチェックできなくなります。特に、証明問題では順番に過不足なく、ある図形や箇所を指定して条件と結果を示していく必要があるので尚更です。次に、③については「問題で示された図とは別に自分で図形を描いてみること」です。テストの問題ではしばしば、図形が用意されることが多いですが、それだけを頼りに解いてしまうと、本来は同じ大きさでない 2 つの角が同じに見えたり、正三角形の存在に気づかなかったりします。というのも、出題された図は全て正しいという思い込みで問題に取り組んでしまうからです。実際は角度の微妙な違いが簡略化され、何よりも図の縮尺が予め小さく決められてしまいます。自分で図を描けば、図の大きさも方向も決めることができるので、公式を使うポイントに気づきやすくなるでしょう。

『中学英語』2～3年　担当　吉川 弘晃

中学英語の授業ではこれまで通り、各回で決めた文法項目ごとに編集された例文集をコピーして、その場で講師と生徒さんが一緒に音読し、文中の単語や時制を変えて作文クイズを行い、来週までに例文を覚えてきてもらっています。この取り組みの狙いは、生徒さんの語彙力が補強されるだけでなく、英語で簡単な文を書くということにも慣れてもらうことにあります。

一方で学年が上がってくると、短い文だけでなく、一定の量の文章を読む訓練も必要になります。いわゆる長文問題は、一つひとつの文章を順番に追うのが基本です。しかし、複数の文が集まった長文で注意すべきは、文と文の繋がりを示す言葉、つまり接続詞に注意することです。and や so であれば順接（A だから B になる）及び情報の追加（A に加えて B）、but や however であれば逆説（A に対して B）といった接続詞は、前後の文章の関係を表すヒントになっているので、そこを見過ごさないようにしましょう。そして、長文問題で最も苦労させられるのは、正誤問題（選択肢の中から文中の内容に即した文章を選ぶ）です。コツは、いつも生徒さんに伝えているように、「選択肢の誤った部分に × をつけて残ったものを選ぶ」というものです。消去法を使うことで、必要に応じて素早く読んだ文章を見直す癖がつくので、先入観による誤答が減ることでしょう。また、長文に慣れてきたら最初に正誤問題の選択肢の内容を確認した上で、英文に取り組むのもいいでしょう。もっとも、細かい箇所の理解は文法や語彙力がものを言いますので、普段からの小テストや単語の勉強は大事にしてください。

『高校英語』A・B・C　『英語講読』A・C　　担当 浅野 直樹

今回は英語の学習法について書きます。

どの英語学習者にとっても語彙は重要です。語彙を直接的に増やすためには、『システム英単語』のような羅列型の単語集を使うか、『速読英単語』のような長文型の単語集を使うのが一般的です。それらの他に『百式英単語』というものがあると最近知りました。羅列型の単語集ではあるのですが、頑張って覚えようとするのではなく、単語とその意味の音読を繰り返せば自然に覚えられるという方法が斬新です。英語講読クラスのようにリアルな英文をたくさん読みつつ、引っかかった語を逐一調べていく古典的なやり方も有効です。何気なく使っているカタカナ語を調べてみるとその元となっている英語を覚えられるということもあるでしょう。このようにいろいろなやり方がありますので、語彙を増やすという意識さえ持ち続ければ語彙は増えるはずです。

リスニングに関しては、学習用の音源を 1.5 倍速で繰り返し聞くとよいという話を複数の出所から得たので、自分で試してみました。確かにこれは効果がありそうです。1.5倍速に慣れると通常の速度がゆっくりに感じられます。1.5 倍速といってもネイティブが普通に話すくらいの速度でしょうから、それに慣れるべきだというのももっともなことです。

大学入試で出題されるような短文空所補充の文法問題はゲーム感覚で繰り返し練習するのがよいと信じています。自動車の運転免許を取得する際の学科試験をコンピュータで練習するのと同じ要領です。つまり、実際に英語を読み書きするのとは別種の競技だと捉えたほうがよいということであり、多くの人にとって練習を積めばそれなりにできるようになることだということです。

日々のクラスでの経験から英語の学習法を磨き、それをまたクラスで活用するという循環を続けたいと思っています。

『イタリア語講読』　　担当　柱本 元彦

いわば初級文法仕上げのコースとして＜講読 I ＞のクラスを設けていましたが、受講生の二名が非常に優秀なため、両名とも短期間で進級することになり＜講読 II＞に合流。この冬学期からは再び I も II もない講読クラスに戻りました。テクストは、前期に＜講読 II＞で読みはじめていたカルロ・レーヴィの《Le parole sono pietre（言葉は石である）》です。本書はシチリアがテーマですから、レーヴィは、ほんとうは伝えたかったカラブリアでの経験を省いてしまいました。けれども、省かざるをえなかったと言いながら、イントロダクション（長大な！）のなかにそれを書き込んでいます。講読 II は、ぎゅっと圧縮されているのか伸び伸びしているのか、山あり谷ありの文体の少し難しいこの序文を終えたところでした。そういうわけでイントロダクションは本文とはあまり関係がなく、今期はそのまま第一部の最初から三名で読みはじめました。1951 年、シチリアの寒村に生まれたニューヨーク市長が、故郷を表敬訪問します。ムッソリーニがイタリア中に書き散らした標語のひとつが崩れかけた壁にまだ読める村に、アメリカ天国から、アメリカ移民となった彼らの一人が、彼らの一人だけれども眩いばかりに神々しい人物が帰ってくるのです。ユーモアの文章は中級講読で乗り越えなくてはならないテーマでしょう。しかもレーヴィのこの＜物語＞は実話ですから、シチリアの土地とその人々、その時代について知ることができるのも興味深いところです。

『フランス語講読』A・B　　担当　渡辺 洋平

フランス語講読 A の授業は、今学期もアンリ・ベルクソンの『物質と記憶』を読み進めています。順調なペースで進んでおり、現在は第 2 章の終盤に差し掛かっているところです。前回の山びこ通信では、ベルクソンによるふたつの記憶の区別について書きました。ひとつは身体の内に習慣として形成される記憶、もうひとつは人生における一回限りの出来事として保持される記憶です。ベルクソンはここから、二種類の「再認」を区別していくことになります。

「再認」とはやや堅苦しい訳語ですが、私たちがつねに行っている活動でもあります。例えば、ある人に再会するならばその人を「再認」するわけですし、目の前の物体が「机」であると分かるのは、すでに持っている「机」という言葉の記憶を用いて目の前の物体を理解することですから、これもやはり「再認」なのです。ベルクソンは、現在の知覚と過去の記憶が協働することでおこなわれる認識行為全般を「再認」と呼んでいるのです。

さて、再認のひとつめのタイプは、よく知っている町を歩くときのように、まったく意識せずとも体が自動的に動くような場合です。ベルクソンはこのような再認を「瞬間的再認」、「機械的再認」、「自動的再認」などと呼んでいますが、これは、いわば精神の作用を介することなく身体のみによって可能となっている再認であると言えます。

それに対し、もうひとつの再認は、一回限りの記憶、各自の「思い出イメージ image-souvenir」がつねに作用しているようなタイプの再認です。自動的再認がやや極端な事例であったのに対し、こちらはより日常的に行われている類のものです。ベルクソンは、他人の話を聞き、理解するという例を考察しています。机の例と同じように、他者の話を聞き、それを理解するためには言葉に関する記憶が介入していなくてはなりません。したがって、他人の話を理解するということは、相手が発する言葉を、みずからの記憶と照合しながら解釈することに他ならないのです。このように、私たちは、日常生活においても、つねに知覚と記憶を混ぜ合わせながら活動していると言うことができます。

このように、通常混合状態において存在している知覚と記憶のあいだに区別を導入すること、両者のあいだに本性の差異を見定めることこそ、『物質と記憶』におけるベルクソンの大きな独創性であると言えます。そして、知覚がつねに現在という時間においてなされるのに対し、記憶は過ぎ去った過去にかかわるものですから、ベルクソンは現在と過去というふたつの時間を全く異なるものとしてとらえていることになります。

さて、それでは知覚と記憶、現在と過去は一体どのように関係しているのでしょうか。これこそが『物質と記憶』が探求する主要なテーマのひとつであり、とりわけ第 3 章の主題となるものなのです。

フランス語講読 B のクラスは現在、昨年度の秋学期から読んできたベルクソンの「形而上学入門」の最終盤に差し掛かっています。この論文にはベルクソン哲学のエッセンスが詰まっているとも言われ、それはもちろんその通りなのですが、その分抽象的な議論も多く、つかみ所が難しかったかもしれません。それでも粘り強く読み続けてきてくれた受講生の方々に感謝の念を捧げたいと思います。今学期中に読了し、4 月からは新しく、アンドレ・ジッド（André Gide 1869-1951）の『田園交響曲 La symphonie pastorale』を読み始める予定です。『田園交響曲』は分量もさほど長くなく、文章も初級文法を一通り習得していれば読み進めることができると思います。興味がおありの方は是非一度お問い合わせ下さい。

さて、ベルクソンは、「形而上学入門」の最後でみずからの考える形而上学の大綱を記しています。それによれば、私たちには、精神に直接与えられた実在がひとつあります。それが「動き」です。ベルクソンが考える実在とは絶えまない動きであり、私たちが通常とらえている「物」は、このたえまない動きを外見的、ないし相対的に停止した姿に他なりません。私たちはたえまない動きである実在を固定し、停止させること

で表象し、さまざまに利用しているのです。このように動きを固定することは、やがて『創造的進化』において、生命進化の過程で得られた人間の知性に本質的な働きだとされますが、形而上学はこの傾向に逆らい、動きそのものを捉えようとする試みとして論じられています。そしてそのために形而上学が用いる方法が「直観」なのです。

とはいえ、「形而上学入門」においては、この直観が意味するところは必ずしも明確ではありません。この辺りはベルクソンの他の著作や論文によって論点を補完する必要があるでしょうが、少なくとも「形而上学入門」が主張しているのは、直観がデカルトの論じた「分析」と「総合」とは異なる認識の方法であること、プラトンのイデア論であれ、カントの批判哲学であれ、従来の哲学・形而上学が実在を外からとらえていたのに対し、直観の哲学は実在と内的に共感するということです。ただしこれは何か神秘的な行為ではなく、実証的なデータにもとづいてなされるものであることも注意すべきでしょう。多くの観察と経験を集め、問題の中心へと身をゆだねることが必要なのです。『物質と記憶』においても、『創造的進化』においても、ベルクソンは当時の科学の論文を渉猟し、綿密に検討した上で自説を展開していきました。このようなベルクソン自身の著作を、形而上学的直観による哲学の実例とみなすことができるでしょう。この意味でも、ベルクソンはやはり直観の哲学者なのです。

なお、前号の山びこ通信で、「形而上学入門」を「講演を元にした論文」と書きましたが、これは誤りでした。「形而上学入門」は、1903 年に『形而上学道徳雑誌』に掲載されたのが初出です。ここに訂正して、お詫び申し上げます。

『ロシア語講読』　担当　山下 大吾

前学期に引き続きプーシキンの短編集『ベールキン物語』が講読のテクストで、現在は最終編の『百姓令嬢』を読み進めております。受講生は前学期の途中から T さんお一方となりました。以前と比べ少し寂しい雰囲気の昼下がりの時間となりましたが、次学期から復帰したいとおっしゃって下さった N さんの言葉を思い起こしつつ、アクセントの位置も含め、一語一語文法を確認しながら、以前と変わらぬスタイルで読み進めております。読む量は変わらず訳読のご担当が倍となられた T さんのご苦労はさぞやと当初お察し致しておりましたが、以前と変わらずほとんどミスなく堅実に訳される T さんのお姿を前にして、その不安も杞憂に過ぎなかったと安心しております。

『百姓令嬢』の前編『駅長』は、冒頭で見られる修辞疑問の繰り返しや、身分の差に起因する口調の違いなど様々なレベルにおける多彩な文体は勿論のこと、後にゴーゴリの『外套』やドストエフスキイの『貧しき人々』などで幾度となく繰り返される、ロシア文学を語る際に欠かせない人物像の一つ、恵まれない小さな人々の生き様を、主人公サムソン・ヴィリンの姿を通してまざまざと描き出したものとして評価の高い作品です。その中でも、大事な一人娘ドゥーニャを連れ去ったミンスキイから、言わば手切れ金として手渡された紙幣に対してヴィリンの採った態度が描かれるエピソードは、動作そのものに焦点が絞られ、装飾的表現や説明が極限まで抑えられながらも、様々な感情が余すところなく生き生きと浮かび上がる箇所として広く知られています。

作品最終部で描かれる、ドゥーニャが両親の墓を訪れた際のくだりも含め、ホメーロスなど古典詩人で指摘される economy of phrase の技法を彷彿とさせる読後感は今回も変わりありませんでしたが、作品の成立過程を検証してみると、プーシキンは一度この作品を書き終えた後、その翌日に改めて上述のエピソードを書き加えていたことが認められます。簡潔で短いながらも、奥行きの深い豊かな内容を伝えるプーシキン的心理描写の極北とも評すべき箇所は、言わば究極の付加によるものであり、これまたこの上ない興味をかきたてられる逆説的な史実と言えるでしょう。

『ドイツ語初級』『ドイツ語講読』　担当　吉川弘晃

講読クラスでは、去年と同じく Peter Blickle のドイツ中近世史に関する本を読んでいます。特定の分野を扱う論文スタイルの文章、原則として根拠を示しながら論理的に書かれているため、若干の専門用語や論理運びに使う接続詞を覚えてしまえば、文章を追うことはさほど難しくはありません。あとは細かいニュアンスの違い、特に接続法の部分をしっかり読めるかどうかが鍵になると思われます。接続法 I 式は、論文ではしばしば自分以外の発言や情報を第三者として伝える時に使われますが、これに注意することは、筆者自身の意見と引用された情報を区別して理解することにつながるからです。

初級クラスでは、基礎文法を一通り終えたということで、ZEIT 紙の記事を取り上げ、語彙や文法を確認しながら音読と精読を行なっています。今読んでいる記事（“Sprechen Sie doch Deutsch!” ZEIT ONLINE 2017 年 8 月 23 日付、24 日編集）は、CDU（ドイツ・キリスト教民主同盟）の政治家イェンス・シュパーンの寄稿記事です。彼は、近年の外国人観光客への対応が行き過ぎて、首都ベルリンのレストランでしか注文できないということを批判しました。しかし、この発言がドイツの移民受入の政策に反対するものとして一部の槍玉に挙がり、それは「国粋主義」ではないかという声すら聞こえます。冷戦が終わって数十年、グローバリズムは移動の自由や文化交流の促進といった光を放ちましたが、他方で世界的な経済格差とそれに対する地域の反発という影を落としています。自国の首都で英語話者ばかりが優先されてしまうという状況をどう捉えるか。母語でのみ暮らす多くの人々はどうすれば良いのか。この問題は、英語とグローバリズムの時代に日本でドイツ語や他の外国語を学ぶことにどういう意味があるか、という我々自身の問題にもつながってくるでしょう。

『ラテン語初級文法』『ラテン語初級講読』　担当　山下 大吾

二学期制で前学期に開講した初級文法クラスは後半のプログラムに入り、接続法や独立奪格構文など所定の過程を順調に進んでおります。受講生は引き続き Cat さんお一方です。先に進んだので前に習ったことを思い出すのが大変だとの感想を頂きましたが、その思い出すことや繰り返しが何よりの力に繋がり、いずれ記憶に留まることになるものと思われます。練習問題の正答率も高いまま維持されており、このまま無事進んで教科書を一冊まるごと「あげる」その時を今から心待ちに致しております。

講読クラスは A クラスと C クラスが散文のキケロー、B クラスが韻文のホラーティウスとなっております。なお『義務について』を読み進めている C クラスは受講生のご都合で今のところまだ開講されておりません。2 月中旬の再開を予定しております。いずれのクラスも文法を一通り終えた方でしたら受講可能ですので、興味を持たれた方は是非ご連絡下さい。

A クラスでは引き続き『友情について』を講読中、22 節まで進みました。受講生は変わらず Cu さんお一方です。プラトーンを引くまでもなく、人間が神から与えられた力の内で知恵ほど貴重なものはないと一般に言われますが、キケローはその見解を認めながらも、その次に位置するものは

友情であると 20 節で主人公ラエリウスに語らせています。この作品の献辞の対象である無二の親友アッティクスに対するキケローからの最大級の賛辞と読むことが出来るでしょう。

B クラスでは『諷刺詩』2 巻計 18 編の読了がいよいよ間近となってきました。その内容は諷刺というジャンルに相応しい、時に放埒とも言えるものから、2 巻 6 編に代表されるホラーティウスならではの田園賛歌に至るものまで多岐にわたり、文法や特に語彙のレベルに関しても決して易しいと言えるものではないテクストを、一語一句いつもと変わらぬ姿勢で根気強く読み進められた Cac さんの情熱に心からの拍手を贈りたく存じます。次の作品は Cac さんとご相談の結果、ウェルギリウスの『牧歌』を予定しております。

『ギリシャ語初級』　『ラテン語初級』
『ギリシャ語中級』A・B　『ラテン語中級』A・B
『ギリシャ語上級』A・B　『ラテン語上級』　担当　広川 直幸

今学期は、新規開講した授業はないが、ギリシャ語とラテン語とを合わせて九つの授業を継続して開講している。

ギリシャ語初級は、この授業では定番になった Peckett & Munday, *Thrasymachus* というイギリスで出版された教科書を学んでいる。昨年の四月に開講してもうすぐ一年が経つ。今学期で教科書の半分を超えるところまで進むので、順調に行ってあと一年掛からずに終えることができるのではないかと予想している。

ラテン語初級は、これもまた定番になった Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana*（教科書）と *Exercitia Latina*（問題集）を用いている。本文を音読して、分からないこと気をつけるべきことを説明して、練習問題を解くというやり方で進めている。練習問題によって本文の理解度を確認することができるように作られているので、本文の訳読は基本的に行わないようにしている。

ギリシャ語中級 A では、ルキアノスの『本当の話』を読んでいる。肩肘張らずに気楽に読めるものなので、一度に OCT で 3 ページ程度を目安に進めている。もう第一巻は読み終え、今は第二巻を読んでいる。

ギリシャ語中級 B は、プラトーンの『ソークラテースの弁明』を読み終えた。今回『弁明』を再読しながら、ソークラテースと老いの関係が気になるようになり、そのことに言及していて、なおかつ短くて箸安めになるものをということで、クセノポーンの『ソークラテースの弁明』を次に読み始めた。受講生によるとクセノポーンはとても読みやすいとのことである。

ラテン語中級 A は、キケローの『カティリーナ弾劾第一演説』を読み終えて、今はリーウィウス第一巻を読んでいる。「序文」がやはり難物で、古いテクストと新しいテクストでは校訂と解釈が異なるところなどもあり、かなり時間を取られてしまった。いまはまだアルバ・ロンガが建設されるところまでしか進んでいないが、徐々にペースを上げて行きたいと思っている。

ラテン語中級 B は、プリーニウスの『博物誌』第七巻を読んでいる。整えられた文学作品とは全く違い、知りえたことをどんどん書くという態度で書かれていて、読みやすいとは言えないが、これはこれでプリーニウスの人柄が垣間見えるようで面白い。ちなみに、『テルマエ・ロマエ』で

有名なヤマザキマリがとり・みきと二人で描いている漫画『プリニウス』は、気軽に読めて、プリーニウスに親しみを感じさせてくれるので、『博物誌』を読み始めるよいきっかけになるのではないかと思う。

ギリシャ語上級 A は、アイスキュロスの『ペルシャ人』を読んでいる。従来どおり West のトイプナー版を中心にして、いろいろな校訂本や註釈書等を参考にしながら、本文批判について一々検討しながら進めている。一度に進む量は少ないが、既に半分を読み終えた。

ギリシャ語上級 B は、ロンギノスの『崇高について』を読んでいる。読み進むにつれ、文学を分析するための理論というよりは、創作のための理論という面が強いのだと感じるようになってきた。とはいえやはりギリシャ語が難しく、特に専門用語に関しては LSJ もあまり当てにならないので、悪戦苦闘している。

ラテン語上級は、カトゥッルスを読んでいる。長めの詩から成る中盤がようやく終わり、エレゲイア詩が集められた部分に入ったので、来学期には読み終わるのではないかと思う。

『新約ギリシャ語初級』　担当　堀川 宏

このクラスは 2014 年 12 月に「新約聖書のギリシャ語」を基本から学ぶ授業として始まりました。まず土岐建治『新約聖書ギリシア語初歩』（教文館）を教科書にして、文法の基本を約一年かけて押さえた後、新約聖書の本文「マタイによる福音書」を少しずつ読み進めてきました。はじめは基本文法を逐一確認しながらのたどたどしい講読でしたが、しばらくすると辞書の使い方などにも慣れて、今では受講生が準備してくれた翻訳に必要な修正を施したうえで、翻訳とギリシャ語原文との比較検討を行なえるまでになりました。途中休講の多い時期もありましたが、三年と少しの時間をかけて、受講生はギリシャ語本文の価値を実感できるところまで実力を伸ばしたことになります。

さて、このクラスの受講生は現在一名ですが、その一名がこのたび仕事で京都を離れることになりました。そのため上記の歩みも三月でいったん区切りとして、四月からは新しい受講生の受け入れを待つことになります。文法でも講読でも新たにスタートを切る好機ですから、関心のある方はぜひお問い合わせください。開講曜日や時間帯についても相談に乗ることが可能です。新約聖書のギリシャ語のシステムは「古典ギリシャ語」よりも多少は簡略ですから、一度挫折した方の学び直しなどにも好適かもしれません。新しい出会いを楽しみにしています。

『漢文入門』クラス紹介

新任講師のご紹介

2018年4月着任の先生です。

陳 佑真（ちん ゆうま）

京都大学文学研究科博士後期課程

大学院で漢文を研究していて地元に帰り、高校までの友人と飲みにいくと、百発百中で以下の反応が返ってきます。「何がおもろうてやっとうねん（＝漢文はどこが面白いのか）」「お前そんなわけわからんことやっとってどないして飯食うてくねん（＝陳個人にとってどんな利益をもたらすのか）」残念ながら二番目の問題は今後の課題とさせていただかざるを得ないのですが、第一の問題については私が大学の中国哲学史という研究室に入ってから八年間考えてきた、現時点でのお答えを用意しております。

私は目の前に現れた漢文を読解する、著者が何を考えていたのかわかる、という過程そのものが楽しいことだと感じています。国語の教科書の漢文には最初から句読点や返り点、送り仮名が打たれていたかと思いますが、ほとんどの場合、漢文は本来点が打たれておらず、読者が赤ペンを持って、ここで切れるのかな、こうやって返るのかな、と悩まなくてはなりません。問題を与えられて、自由にああでもない、こうでもない、と思索しながら、作者と知恵比べをするのです。

たとえばお酒が大好きな陳君が禅寺へ観光へ行き、門に「不許葷酒入山門」と書かれた板が掛かっているのを見たとします。これは漢文の白文（句読点や返り点が打たれる前のもの）で、これに句読点を打って書いた人の考えを読み解かなくてはなりません。お寺に詳しい友達が「ははあ、これは葷酒山門に入るを許さず、つまり、生臭物や酒を持って門をくぐることは許さんぞ、という意味だよ、飲むのはあきらめたまえ」と言いました。しかし、陳君はどうしても境内で飲みたい。どうすれば飲めるのか。答えは簡単、赤ペンで一つ点を打ってしまえばいいのです。「不許葷、酒入山門」とすれば、「葷を許さず、酒は山門に入れ」と読むことができます。生臭物はやはり許されないので唐揚げをおつまみに、とはいきませんが……。

また、漢文というのは一つの言語ですから、それで表されるのは決して堅苦しい、難しいお話ばかりではありません。「君子は必ず其の独を慎むなり」（『大学』）、立派な人は誰も見ていないところでも人に見られているのと同じように威儀を正しているものだぞ、という、先生から言われたらうんざりしそうな言葉も漢文ですし、「螢無くして鄰家の壁を鑿ち遍（つ）くすも、甚（なん）ぞ東墻は人の窺うを許さざる」（『牡丹亭還魂記』）、螢の光で苦学しようとしても螢が見つからないから隣のかわいい子の部屋の壁に穴をあけて灯りをとろうとしたけど覗かせてくれないよ、なんていうのも漢文なのです。

古の賢者たちが人生の問題に正面から向き合って書いた文章を読解して自分の生き方に活かすもよし、おもしろおかしい滑稽話を読んで古の人たちと一緒になって大笑いするもよし、ゴシップ記事を読んで古の人たちと一緒に眉をひそめるもよし。漢文の海からは、書かれたものの数だけの楽しみと思索が得られます。

本講座では、受講者の皆様のご関心に合わせてテキストや方法を選びたいと思います。訓読のやり方、辞書の使い方から丁寧に学習のお手伝いを致しますので、全く漢文の勉強をしたことがない方も是非お越しくださればと願っております。

（「不許葷酒入山門」については、私が大学の講義で伺ったお話を元にしました）

退職される先生

この度、下記の先生が退職されます（敬称略）。これまでご指導頂き、誠に有り難うございました。新天地でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

福谷 彬（2017年度「漢文入門」担当）　森山 純（2016〜17年度「しぜん」担当）

『将棋教室』　担当　中谷 勇哉

12 月に久々の「将棋オープン戦（ トーナメント ）」を行いました。以前までと違い、その日に終わらなければ次回に持ち越し、というわけにもいかず心配していたのですが、なんとか時間内に表彰まで行うことができました。結果は、優勝こそ以前通ってくれていたＮさんでしたが、二位三位は現役生のＫくんとＮくんで、見事に教室の面目を保ってくれました。

毎回の教室でももちろん真剣勝負をしているのですが、トーナメントとなると皆気合が入るようで、10 人以上の子どもがいるにも関わらず、静寂の中で駒音だけが響くという空間が生まれました。将棋は礼節と論理のゲームです。集中して考え、自分なりの答えを出すということは、きっと今後の糧になるはずです。

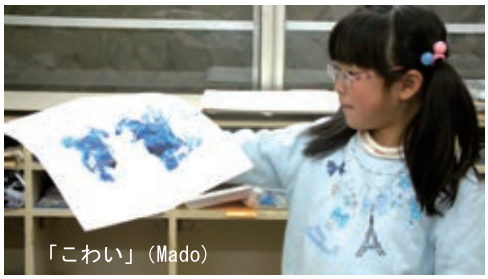
さて、教室では、終局時間のズレからくる空き時間を活用するため、毎回事前に詰将棋を配っておくという試みを始めました。詰将棋は、クイズやパズル的な楽しさがあり、集中力を維持させるという効果があるだけではなく、次の対局への準備運動にもなります。実際、羽生善治二冠や藤井聡太五段など、多くの棋士が対局前に軽い詰将棋を解いていると述べています。

三手や五手の短い詰将棋は、何題も解くことで、詰みの形を知り、感覚を養うことにつながります。慣れていけば、対局中に完璧に読まなくても、ある程度直感的に詰むかどうか判断することができるようになります。テレビ対局をご覧になる方はお分かりになると思いますが、プロ棋士が解説の中で「おそらく詰み」「だいたい詰み」とよく言うのですが（ 実際それは当たっています ）、これはその感覚が養われているからできることなのです。

感覚（ 直感 ）を鍛えることは、先に述べた集中して深く読むことと一見矛盾することのように思えます。しかし、両者は密接にリンクするものです。感覚があっても集中できなければ実際に詰ますことはできませんし、集中力だけあっても、毎度毎度詰みがあるかどうか深く考えることは現実的ではありません。感覚的に「おそらく詰む」と思ったときに、そこで「深く読む」フェーズに切り替えることによって、実戦で初めて詰ます（正解にたどり着く）ことができるのです。

教室では、詰将棋と実践を通して、それら感覚と集中力の両方を向上できたらと思います。

『かいが』A・B　　担当　梁川 健哲


「こわい」(Mado)

「しあわせ」(Mado)

「げんき」(Masa)

「見えないものを描く」

「あれしようよ！」という Madoka ちゃんの提案で、今学期も「見えないものを描く」取り組みをしました（A クラス）。

今回は話し合って、① げんき、② こわい、③ ?（みんなが自分で決める）、という 3 つの題目になりました。

「元気な感じ」のする色は、形は…という風に、心の中に目を凝らして、思い浮かんでくるままに描きとめるのです。描き終えるまで互いの絵を見えないよう衝立てをし、あとで見せ合って意見交換するのですが、ここでMadokaちゃんが見出した方法は、「自分でも分からないように、手元を隠して描く」という方法でした。Masatou 君については、「げんき」というテーマだけで何パターンも描いてくれました。このように、自らが方法を考え、奥行きや広がりを見出していく姿勢をいつも嬉しく思います。

また、B クラスでは、絵の具のにじみを活かして「空気感」を作る実験が行われました。にじみそのものにクマの横顔を見出す人もいれば、にじみの雰囲気を活かして風景画に仕上げる人もいました。

▼発表会。「すごい！元気元気！」と喜ぶ Mado ちゃん

「巨大な絵の中に」

落葉の降り積もるころには、園庭を巨大なキャンバスとして、体中を使って地面に絵を描く取り組みをしました。描いては消すを繰り返すうちにお話が広がっていき、みんなは文字通り「絵の世界の中に」入り込んでいきました。(A・B クラス)

「版画」

その他の取組として、版画を取り入れています。消しゴムハンコに始まり、スチレン版、ビニール版、木版など、各自が無理なく取り組める方法を選びながら、また、それぞれの違いを感じながら制作をしています。

小学校の自由課題で消しゴムハンコを活かした紙芝居を制作してくれた人もいれば、彫刻刀を使うことに自信と喜びを見出す人、インクをのせて刷るという工程が好きな人、響くポイントは人それぞれのようです。
版画は工夫の余地が多く、方法を探求し続けられる奥深さがあり、今後も取り入れていきたい課題です。

「ウマイ・ヘタ」という、曖昧かつ一律な評価に晒されるうちに、絵に苦手意識が芽生え、嫌いになってしまう人は、今でも沢山いるのだろうと思います。言葉をかける大人側は、「今、誰が、何のために描いているのか」について立ち止まって考えなければならないと思いますし、子どもたちにおいては自由な実験が許されている感覚の中で、発見を喜び合い、互いを認め合いながら、のびのびと描くことを楽しんで欲しいと願っています。